

# 研究の現場から

## 「道德科学研究センター」から「道德科学研究所」へ

道德科学研究所 所長

犬飼 孝夫

法人名称の「モラロジー道德教育財団」（以下「財団」）への変更に伴い、「道德科学研究センター」を「道德科学研究所」に改編しました。

「道德科学研究所」は昭和四十七（一九七二）年に「モラロジー研究所」に改称されるまで用いられていた法人名であり、ご先輩のモラロジアンの皆様には懐かしく響くものと思います。今回、この名称を受け継ぐ「道德科学研究所」として、廣池千九郎の志を実現すべく、学術的側面からより一層尽力していく所存です。

今回の改編で「財団」の下に「道德科学研究所」が置かれることにより、「財団」が倫理道德の理論と実践に関する学術的研究を行い、その成果に基づいて、家庭・学校・社会における道德教育を推進している団体であることを内外に、より明確にすることができ、「財団」に対する社会的信頼度を高めることができるものと思います。

以下、「道德科学研究所」（略称「道科研」）の新たな研究体制、研究方針などについてご説明します。

### 研究室体制からプロジェクト体制へ

昨年度まで、生命環境研究室、社会科学研究室、人間学研究室、教育研究室、廣池千九郎研究室、歴史研究室、伝統文化研究室という七つの「研究室」に分かれて研究活動を行ってききましたが、さまざまな専門性を有する研究者のシナジー（相乗効果）を引き出すために、「研究室」という枠組みを取り払い、「プロジェクト体制」へと移行しました。

### 「重点三分野」

道科研にとって、創立者・廣池千九郎の事跡と思想を辿り、諸聖人を源とする道德思想の解明と、その教育の深化・発展に資することは研究の要と言えます。また、モラロジを総合人間学として発展させるためには、さまざまな学問的領域を横断する学際的研究が必要です。さらに、「モラロジー道德教育財団」という新たな法人名が示す

ように、道德教育に関する専門的・実証的な研究も重要となります。そこで、道科研における研究活動の「重点三分野」を以下のように定めることにしました。

（1）新たな時代の倫理道德のあり方を探究し、人類社会における諸課題の道德的解決に資する研究

（2）家庭・学校・社会における道德の教育・学習・実践の充実に資する研究

（3）廣池千九郎の事跡と思想の研究、および最高道德論とその教育の深化・発展に資する研究

### 三つの「研究推進プロジェクト」

この「重点三分野」を「モラルサイエンス研究推進プロジェクト」「道德教育研究推進プロジェクト」「モラロジー研究推進プロジェクト」という三つの「研究推進プロジェクト」が担い、研究を進めてまいります。各「研究推進プロジェクト」にはプロジェクトリーダーとサブリーダー、および、コーディネーターが配置され、研究の旗振り役（ナビゲーター）となります。

今回の「プロ



「プロジェクト体制」の肝となる点は、道科研の研究者がいずれかの「研究推進プロジェクト」に所属するというわけではないということです。道科研は縦割り型の組織であり、相互の学際的協働による相乗効果の創出が「プロジェクト体制」への移行の主要眼となっているからです。道科研の研究者は、すべての「研究推進プロジェクト」に参画する意識をもって研究活動の充実と発展に努めてまいります。

## 二つの「研究プロジェクト」

「研究推進プロジェクト」のほかに、廣池千九郎と皇室を主たる課題として総合的研究に取り組む「伝統文化研究プロジェクト」と、歴史認識問題に関する調査・研究に取り組む「歴史研究プロジェクト」を設置します。この二つの「研究プロジェクト」は、いずれも専門性の高いもので、プロジェクトメンバーを明確にして研究に取り組めます。ただし、これらの「研究プロジェクト」に所属する研究者も、先にあげた三つの「研究推進プロジェクト」に参画します。

## 基本的に公開で行う定例研究会

これらの「研究推進プロジェクト」と「研

究プロジェクト」がそれぞれ、定例研究会を企画し開催します。これらの定例研究会は基本的に公開で開催します。また、研究成果は年に二回発行している学術誌『モラロジー研究』ならびに「道徳科学研究フォーラム」や「財団」のホームページなどを通じて発信します。難しい研究内容を分かりやすく解説し、教育活動の現場でご利用いただけるような「ブックレット」や「資料集」の発行も企画してまいります。

## 財団の活動に資する研究を

この数年来、道科研の研究者には、(A) 倫理道徳の理論的研究、(B) 倫理道徳の実践的研究、(C) モラロジーの理論的研究、(D) モラロジーの実践的研究という「研究四領域」を意識し、理論と実践の往還という側面から研究テーマを設定するよう促してまいりました。また、年度ごとに研究者の研究テーマを「研究四領域」上にマッピングし、道科研全体の研究テーマのバランスを検証すると共に、協働や連携の可能性を検討してまいりました。今後は、先に述べた「重点三分野」と「研究四領域」を重ね合わせ、「財団」の教育活動に具体的に資する研究成果を上げるべく、研究の焦点化を進めてまいります。

と思います。

また、令和八(二〇二六)年の「財団」創立百年を見据え、今年の夏を目前に道科研のあるべき姿を示す「ビジョン」と、その実現に向けた「ロードマップ」も作成したいと思えます。

## より開かれた道科研に

今回のコロナ禍により、社会におけるオンライン化が急速に進展しました。道科研も例外ではなく、定例研究会などもオンラインで開催するようになり、維持員をはじめ参加して下さる方も多くなっています。今年一月に開催した「道徳科学研究フォーラム」には、全国からオンラインで百九十九名余の方々ご参加くださいました。このように、奇しくもコロナ禍により、道科研の活動がより開かれたものになり、道科研の活動の「見える化」が進んでいます。道科研の研究会などへの参加をご希望の方には、定期的にメールでご案内させていただきますので、道科研事務局 (rc@moralogy.jp) までご連絡ください。

道科研は「財団」の教育部門との協働をより一層推進し、研究的視点から教育活動に参画していきます。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。